ラヴェル：弦楽四重奏曲

28 歳のラヴェルが 1902 年 12 月から翌年 4 月にかけて書いた傑作。若き作曲家がドビュッシーの 10 年前の作品に範を求めたのは明らかだ。1904 年 3 月 5 日、国民音楽協会の演奏会で、エイマン四重奏団によって初演された。先輩ドビュッシーは「一音たりとも変えてはならぬ」と最大級の賛辞をおくった（しかし、ラヴェルは全面的な改訂を施した）。ソナタ形式の第 1 楽章は対位法とホモフォニックが効果的に使われ、第 1 主題はフリギア旋法、第 2 主題はヒポフリギア旋法で対比される。これらのモチーフは終楽章で循環形式的に回帰する。第 2 楽章は三部形式のスケルツォ。めまぐるしいピツィカートと、弱音器をつけたカンティレーナの対比の妙。弱音器が滲むような旋律を強調する緩徐楽章には、典雅なリディア旋法が用意されている。快活なロンドの第 4 楽章では、第 1 楽章のモチーフが巧みに現れて、見事な大団円を聴かせる。

ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲 第 12 番《アメリカ》

ドヴォルザークのアメリカ時代、1893 年の作品。渡米して最初の夏季休暇をチェコ移民の村で過ごすあいだに、わずか三日でスケッチを書き終えたという。第 1 楽章はソナタ形式。冒頭、ヴィオラで弾き出される有名な第 1 主題はフォスターの歌曲のような味わい。第 1 ヴァイオリンのトリルをキッカケにはじまる第 2 主題を経て、現われる牧歌的なコデッタ主題にも、古き良きアメリカが感じられる。第 2 楽章では黒人霊歌風の哀調を奏でるが、中間部ではチェコへの望郷の念がちらつく。第 3 楽章は、近くの森を散歩している時に聞いた鳥のさえずりを使ったというユニークなスケルツォ。第 4 楽章はロンド形式。思わず踊り出したくなるようなロンド主題が印象的。途中には、小さな村の教会オルガンのようなコラール主題が顔をのぞかせる。最後まで明るく愉しげな雰囲気のまま盛り上がって曲を閉じる。